

Newsletter

2007.3.31

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター



「全カリ創設 10 周年、そしてこれから」

山本 博聖 全学共通カリキュラム運営センター部長（理学部教授）

1997年4月に立教大学全学共通カリキュラムがスタートし、本年3月で10周年である。この節目において次の全カリに何かを書き残しておくとするれば、やはり全カリが提供している言語教育・総合教育科目それぞれの授業の充実をいかに現実のものとしてゆくの、ではないだろうか。全カリであろうが、専門学部での教育であろうが、また立教以外の他大学においてもそれぞれで展開している個々の授業内容の充実は、いまさら言及するまでもないことだが、これなくしてはカリキュラムが目指す教育目標達成は不可能であると言っても過言ではない。

立教大学へ入学してくる諸君は、大学での学びを通して個々人の内面での充実・飛躍を図り、社会へと巣立って行く。学生のキャンパスライフの設計は日課表作成から始まる。正課関連、正課外そして大学外と彼らの生活設計のあらゆる場面で計画通りや期待通り、そして予想通りのことに会おうと同じ程度にそうでない事実と直面する。しかし、このようなことが正課においても起こるのが当たり前だとらえてよいのだろうか。現在、多くの大学で授業内容はシラバスとして前もって学生に提示されており、シラバスを執筆した授業担当者はその内容に責任を持つことが当然のこととして求められている。シラバスは授業を担当する教員と受講しようとする学生との間でかわされる契約である、ととらえられている。

2006年度から全カリ科目に大幅にWeb登録を導入し、2007年度はさらにWeb登録科目を増やすこととした。全カリ総合教育科目の多くは、授業開始から1ないし2週間は「お試し」期間であった。その間に学生は自分の希望する授業科目が予想通りないし期待通りであるかの判断の後、正式な履修登録へ進むこととしていた。しかし授業初回の有効活用、授業回数の確保ならびに教育環境を含む様々な大学の環境制約から、Web登録科目を増やす方針を決定した。この方針決定はシラバスと実際の授業内容の充実があつてこそ可能となる。

では、シラバス通りに担当教員が授業を進めさえすれば事足りるのであろうか。ここに「授業における私語」が大きな問題となっている現状がある。本学の大学教育開発支援センターまとめによる「2005年度学生による授業評価アンケート」報告書（2006年10月）をもとに出された「授業中の私語に関する本学の現状（報告）」（2007年1月）によると、＜十分な静肅性が保たれた＞の項目はクラスサイズに大きく依存しており、50名以下の規模から50名毎で区切って151名以上までの4分類で比較されており、151名以上のクラスにおいてこの指数が最も低く出ている。ここでいうクラスサイズは科目に登録している学生数ではなくアンケートに回答した学生の数である。全カリは総合教育科目においてほぼこの分類に入る200名以上登録の大人数授業が前後期あわせて107科目展開されている（2006年度実績）。さらに全カリ総合科目はすべてが選択科目である。学生の興味をかきたて授業準備を周到にし、理解への手助けとなるように様々な工夫をこらしている（これらの項目は評価が高く出ている）にもかかわらず＜静肅性が保たれた＞は低いのである。

全カリ発足と同時に刊行がスタートした「大学教育研究フォーラム」の創刊号（1997年春）に小林純経済学部教授（2006年度言語部会長）による「私語のない授業」が掲載されている。小林教授の体験と共に当時（現在においても）大人数でありながら私語のない授業を実践されている経済学部山口助教授（当時）による「金融論」が紹介されている。山口先生の体験と実践の紹介と共に私語のない授業実現へのいくつかの押さえるべきポイントが簡潔にまとめられている。それらは①メリハリをつける、②「参加」を促す、③常に1対1のつもりで、④「出席甲斐」を実感させる、⑤「講義は入り口」と位置づける、とされており、最後には山口先生の言葉『講義を「おもしろく」するためには努力をしない自分を無罪放免してしまうことだけはやめてほしいと思う。』で結ばれている。（8頁へ続く）

目次

全カリ創設10周年を迎えて	山本 博聖 (1)
2006年度 カリキュラムの試み	
総合教育科目 スポーツスタディ1<馬術>	佐野 信子・近藤 英幸 (2~3)
言語教育科目 中国語海外語学研修	森園 晴美・初山 友美 (4~5)
英語 R&L-PC	一ノ瀬 和夫 (6)
2006年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動	(7)
2006年度全学共通カリキュラム運営センター メンバー一覧	(8)

2006年度 カリキュラムの試み

【総合教育科目】

スポーツスタディ 1 <馬術>

社会学部助教授 佐野 信子

昨年(2005年)の8月2日(水)から6日(日)までの5日間、本学富士見グラウンド馬場及びクラブハウスにおいて、前期集中科目の一つとして馬術を開講しました。私の所属するスポーツ人間科学教育研究室(2005年度まで「スポーツ健康科学教育研究室」)では、数年前から本授業の開講を検討しておりましたが、昨年度から研究室内で「立教大学らしい種目をより多く開講しよう」との声が高まり、また、種々の条件が整ったこともあり、本年度の開講に漕ぎ着けました。

馬術を専門種目とするわけではない私が授業を担当することから、授業実施にあたっては、準備段階から本学体育会馬術部の多大なご協力・ご支援をいただきました。土橋監督、コーチ、卒業生、現役部員の皆様からのお力添えなしには、実現は不可能でした。特に松井コーチご夫妻には、当日のご指導以外にも実施までに多くの時間を割いていただき、充実したプログラムとなるようにと惜しみないご協力をいただきました。紙面を借りて、体育会馬術部関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

屋外での実技は天候に大きく左右されるため雨天になることを心配しながら授業開始日を迎えました。その心配をよそに、本年度は5日間を通して炎天下での授業となり、人間も馬も暑さに大いに悩まされることとなりましたが、大きな怪我人を出すこともなく授業を終えられましたことをまずご報告いたします。



授業は、馬術の特性を理解し、スポーツとしての真の楽しさに触れるために、乗馬の技能を身に付けるだけにとどまらず、講義を通して馬術についての様々な知識を身につけ、さらには馬の基礎的な手入れ方法についても習得することを目標としました。19名の履修者に対し7頭の馬を用意できたことから、2人から3人に馬1頭を割り当てるのが可能となりました。基本的には5日間を通して同じ馬に騎乗し、さらに自分が騎乗した馬の世話を自分で行うことにしたことで、馬への理解を深め、馬との信頼関係を築くことができたようでした。また、各馬に馬術部のスタッフが複数人ついてくれたことにより、履修生は安心して騎乗に臨めたと同時に、履修者一人ひとりにあわせた沢山のアドバイスを受けることができました。そして世話の方法についても、スタッフの丁寧な解説のもと、実際に飼いつけ、馬装などを体験してみることができました。

ほとんどの履修者は乗馬経験がなかったため、初日にはなかなか足元が定まらず苦勞していましたが、1日6時間にも及ぶ長時間かつ5日間の集中的な授業を受ける中で、馬への理解が深まり、技能の高まりがみられ、最終日には定められたコースを軽速足で走り抜けるスラロームを体験しました。馬との一体感が求められ、自分の指示をしっかりと馬に伝えられなければなりません。課題をやり遂げた達成感に満ち溢れた顔つきでゴールし、自然と馬への感謝の気持ちを表していた履修生達の姿が印象的でした。

開講初年度を振り返ってみて、来年度以降の授業をさらに充実させていくために、私自身沢山の気付きがありました。本授業を通して一人でも多くの学生が馬術の真の楽しさを知り、また、人生を豊かにするものとしてのスポーツを実感し、生涯にわたるスポーツの必要性が認識できるように、本年度の経験をいかしながら今後も魅力ある授業展開を図っていきたいと考えております。

馬と触れ合う素晴らしい体験

理学部化学科3年 近藤 英幸

晴れわたる空、そして照りつける太陽。数日で小麦色になった私の肌が、太陽の光によって、更にジリジリと焼ける。そんな真夏の炎天下の中、立教大学で初めての馬術の授業が行われました。

大学の体育系科目を履修するのは今回が初めてでした。教職課程でスポーツスタディの単位を取らなければならなかったのですが、せっかく取るのなら減多にできない経験をしたい。そう思って調べた科目の中から迷わず馬術を選びました。

学期中にガイダンスを1回受け、ついに訪れた馬術初日。立教グラウンド行きのバスの中で、これからの5日間はどのようなになるのか、私は不安と期待を胸に現地へ向かいました。

現地では馬術部の方々が指導をしてくださいました。まずは講義から…と書いていたら、いきなりの乗馬。予想外の展開に、履修していた他の学生も驚きの表情を隠せませんでした。突然の、何もかもが初めての体験。私が5日間乗ることになったのは立教の馬ではなかったのですが、全身がこげ茶色の舞風という名のサラブレッドでした。背が高く、耳がひょこひょこ動くのが印象的でした。実際に馬に乗ってみると、その視点の高さに驚きました。そして、歩いてみると見た目よりも速度感覚が速い。そうしている内に、あっという間に時間が過ぎてしまい、初日の午前中のプログラムを終えました。

初日の午後は講義でした。テキストを配られ、馬術の特性について学びました。馬という動物は非常に臆病で、理解力に乏しいが記憶力には長けていること…など馬の性質や、基礎知識等を習い、初日を終えました。

2日目以降は、乗馬と世話を繰り返し行いました。乗馬では、テクニックを磨くと共に常歩（なみあし）・速歩（はやあし）・軽速歩（けいはやあし）へと練習がレベルアップしていきました。初日で筋肉痛になりながらも、馬に乗ることの楽しさ、そして馬の表情や感情も少しずつ分かるようになって、いつの間にか馬術の授業を楽しんでいました。どんなに厳しい日差しや暑さの中でも、馬に乗っているときは忘れられるのです。

5日間のプログラムを通して、私が強く感じたこと…それは、馬術が数あるスポーツの中で「唯



一動物を扱うスポーツ」であるということでした。これが一番の特徴であり、馬術というスポーツの醍醐味でもあります。動物を扱うということは、その動物の世話も行わなければなりません。馬にも体調などの様々なコンディションがあるため、馬のことも気遣う必要があります。そうして馬と触れ合うことで人馬一体となってスポーツを行うことが出来るのです。馬の世話をすることも、馬術の一環といえるでしょう。「騎乗している時よりも、世話をしている時間の方が長い」とおっしゃっていた馬術部の方の言葉がとても印象的でした。授業では、2日目～4日目の午後に馬の世話を体験することができ、本当に貴重な経験となりました。

そして最終日に撮影した自分の騎乗姿。ビデオには、短い期間ではあったけれども成長した自分が写っていました。課題点は多く残りましたが、それよりも5日間を通して馬と触れ合うという貴重な体験ができ、他のスポーツでは得ることのできない大切なことを学べたような気がします。大学に入ってから3年目の夏…学生生活の中で、とても良い思い出となりました。

全学共通カリキュラムという誰でも履修できる科目の1つに、このような授業ができて大変嬉しく思います。大学でこのような体験ができるのは非常に素晴らしいことです。また、学生だからこそできる経験だと思います。今後も更に多くの学生が、この素晴らしい体験をすることができるよう、この「馬術」が発展していくことを願っております。

【言語教育科目】

中国語海外語学研修

全学共通カリキュラム事務室 森園 晴美

全学共通カリキュラム言語教育科目「中国語海外語学研修」の視察として、8月20日（金）から9月1日（金）の2週間、北京および上海で学生と共に行動した。（中国語海外語学研修日程：2006年8月4日（金）～9月1日（金））

1. 中国で「中国語漬け」になる毎日

クラス分けテストにより3つのクラス（各10名）に編成され、授業は月曜日から金曜日の朝8：00から11：35まで集中して行われた。復旦大学国際交流文化学院が外国人留学生向けに編集したテキストを使用し、ヒアリングと会話に重点を置いた内容で進められた。

当然ながら、いずれのクラスも授業は説明も含めてすべて中国語で行なわれた。さらに、少人数クラスであるため必ず毎時間発言（発表）することになる。いろいろな面で日本での通常授業と異なり、学生も厳しいと感じていただろう。しかし、開始直後は先生の話が聞き取れない、自分の思うことが言葉にならない状況に苦しんでいた彼らも、このような「中国語漬け」の学習環境の中で、時間の経過とともに着実に力をつけていった。

午後以降は自由時間となるので、キャンパスの外に出て買い物や市内見学などをしたり、復旦大学が開講する文化講座に参加したりなど、各自自由に過ごしていた。授業時間以外にも中国に触れることができる—これも語学研修の大きな特典であると言える。



2. 生活（宿舎）

宿舎はキャンパス内の「復旦大学正大管理発展中心」を利用した。部屋は基本設備（バス・シャワー等）備付でかつ寝室と勉強部屋が別になっているため使いやすく、宿舎から教室や学食、正門までは徒歩5分程度と近い点、さらに売店も近くに複数あり、正門を出れば郵便局、生活用品中心の商店街や銀行が徒歩10分以内の範囲にある点など、生活環境は非常に良好であった。ちなみに、上海の中心地から大学まで、地下鉄・バスなどの利用で約40分ほどであり、不便さは感じられなかった。

3. 圧巻だった「漢語晚会」

授業の最終日の夜は3週間お世話になった先生方をご招待し、学生たちの企画・運営で「漢語晚会」が開催された。演目はもちろん、司会・進行も全て学生たちが中国語で行い、全部で3時間にわたる大規模な催し物となった。演目の完成度は高く、かなりの練習を積み重ねたことがうかがえた。授業の予習・復習、試験準備、そして漢語晚会の練習と生活は相当ハードだったと思うが、すべて乗り切ったその熱意と努力を含め、復旦大学の先生方も我々も皆感激したイベントとなった。

4. 先生方のご尽力

立教側からは2名の先生方が事前研修での指導を含め、全期間学生と行動を共にされたが、授業の視察だけではなく、生活面でのサポートや補習授業の実施など、朝から晩まで常に学生たちに目を配っていた。この研修が大きな怪我や病気もなく、無事に終了したのも、先生方のご尽力なしにはありえないことであり、あらためてお礼を申し上げたい。

5. 最後に

学生が4週間で得たものは、様々で、かつ膨大なものであったに違いない。この経験が今後、学生たちの中でどのように育っていくかが非常に楽しみである。そのためにも、研修終了後も充実した環境づくりをしていくことが、我々にとっての課題であるといえよう。

最後に、今回このような機会を得て、「学生が学ぶ現場」を実際に見ることができたことは、自分にとっても良い「研修」となった。ご協力いただいた方々に感謝の意を申し上げたい。



【復旦大学】1905年創立。文系・理系合わせて17学部を擁する総合大学。学生数44,300人（うち学部生15,700人、留学生2,200人）教員数2,300人（学生・教員数は復旦大学HPより）。

中国語海外語学研修で得たこと

経済学部経済学科3年 初山 友美

私は夏休みに、中国語海外語学研修に参加しました。中国語は大学に入って初習言語として学び始めたのですが、必修の単位を取り終えてからも自由選択科目を取り、勉強を続けていました。大学入学時から今までずっと取り組んでいて、これからも続けていきたい中国語。現地に行って中国語を使いたい、また人々の生活や街の様子など文化的な面にも興味があり、参加を決めました。

復旦大学での授業は全て中国語で行われました。最初は先生の言っていることを聞き取るので精一杯で、45分×4コマの授業がとても長く感じられました。しかしクラスの先生はとても優しく、1週間ほどたてば話も聞き取りやすくなるよと教えてください、私たちがどうしても理解できない言葉は、別の表現で言い換えてくれました。予習や復習、宿題にかける時間が多く、大変だと思ったこともありました。しかし勉強の中身はとても濃く、授業を受け続けるうちにだんだんと余裕も生まれ、時間が過ぎるのも早く感じられるようになりました。授業の内容はもちろんですが、それ以外でも先生の話し方などを注意深く聞くことで、それまで知らなかった言葉の言い回しや用法などを知ることも多かったです。

授業以外の時間は、文化講座を受けたり、週末は遠出をしたり、自分たちでいろいろな場所へ出かけたりしました。私にとって、実際に自分の足で街に出て、中国語を使って行動することが何よりの楽しみでした。皆で早朝の公園に行ったり、チャイナドレスを作りに行ったり、観光地にもたくさん行きました。最初は大人数で行動することが多かったのですが、慣れてくると比較的少人数でも交通機関を使って行動できるようになりました。大学周辺での買い物であれば、一人で行くこともありました。

学校内のスポットや出かけた先ではいつも、いろいろな交流があったように思います。目的地への行き方

が分からないときに親切に教えてもらったり、タクシーの中で運転手さんと会話したり、コンビニの店員さんが私の持っていた電子辞書を見て、そこから「あなたは留学生？」と会話が始まることもありました。学校でも外でも、毎日現地の人々の優しさを感じることができました。

中国以外の国の人にも出会うことができました。まだ授業が始まったばかりの頃、友達と学校付近を歩いていたとき、3人組の韓国人の女の子に道を聞かれて、そのまま中国語を使って会話しながら、しばらく一緒に歩きました。中国に着いたばかりの頃で、中国人以外の人と中国語を使って会話できて、とても嬉しかったのを覚えています。また、中国語を使っての会話は自分の中国語を見直すきっかけにもなっていました。例えば、簡単な単語を何度言っても伝わらず、もっと発音を強化しなくてはと思ったことが今も印象に残っています。

授業はもちろんのこと、この4週間は常に勉強だったと思っています。まだまだ流暢には話せないけれど、語学力が確実に上がったことが実感でき、これからの学習における課題を見つけることができました。復旦大学で学んだこと、街に出てみて学んだこと…その一つ一つを大切にしていきたいと思っています。帰国後も週に3コマ中国語を履修しています。この研修で学んだこととたくさんの思い出を励みに、これからも中国語を続けていきたいです。



R&L-PC 科目の導入と現状

経済学部教授 一ノ瀬 和夫

2006 年度から施行されている全学共通カリキュラム英語プログラムの中で、大きな特徴の一つとなっているのが、コンピュータを使用してウェブ教材 (ALC NetAcademy) を素材とした「R&L-PC」である。この科目の設計イメージは、新カリキュラム施行開始の2年以上前に英語研究室の議論の中で芽生え、その後時間をかけて授業内容、方法、運営方法などを繰り返し検討し、その結果実現に至ったものだが、ある反省とある夢が、その発想の原点にはあった。

まず、反省という点についての経緯になるが、以前の英語プログラムにあった旧「R&L」の科目目標



は、そのタイトル通りリーディング能力とリスニング能力の強化、養成にあった。しかし、毎学期末に実施していた授業アンケートを分析してみると、学生からの平均値以上の評価はあるものの、研究室が期待するほどにはその効果がなかなか上がってこないという点が明らかになってきた。そこで、それまで一定程度の実績があった科目であったがここで冷静に問題点を洗い出し、リーディングとリスニング能力の養成により効果的な授業形態を再検討することにしたのである。もう一点、語学力の養成のためには、授業内容を充実させることは当然だが、同時に、授業内だけに止まらない、いつでも、どこでも学生がそれぞれのレベルと進度に合わせて学習できる環境の構築が是非とも必要であるという思いもあった。

この「反省」と「夢」から「R&L-PC」は生まれたのであるが、授業設計の際に留意したのは、以下の点になる。まず、コンピュータ利用の授業である点を生かして、担当教員はひとりで一度に2クラスから4クラスを受け持つというシステムになっている。この場合の問題は、教員のいるクラスと、そうでないクラスで指導に差が出ないようにすること、学生が主体的に授業参加できるようなプログラムとすること、大人数授業で起こり

がちな教員と学生の意思疎通の希薄化を出来るだけ防ぐこと、などである。これらの課題に対して、まず大学に予算措置をとっていただき、教員のいる教室の映像と音声を他の教室でも視聴出来るようなシステムを準備した。次に、メディアセンターからの全面的な協力をいただいて、教員のいない教室にはメディアセンター勤務の学生に入ってもらい、教員のいる教室に配置する TA が緊急の場合の連絡役を務めるなどの、授業運営管理システムを導入した。

具体的な授業に関しては、統一シラバスを作成し、メリハリのある学習が出来るよう、1回の授業の内側を大きく3つのセッションに分けた。これは、授業内容を検討する過程で、他大学のコンピュータ授業を見学したり、また担当者から意見を聞いたりしていたが、その結果、コンピュータに向かって語学学習をする場合、一度に長時間の学習はむしろ学生の負担になってしまい、あまり効果的ではなく、1回につき15分から20分程度をセットにした学習が効果的であることが判明したからである。

さらに、英語研究室で独自に作成した NetAcademy の内容に沿った学習達成度確認テスト (CHORUS 利用) の実施、毎授業学生に記入してもらう Self-Evaluation Form (リアクション・ペーパー的性格をもつもの) に書かれた質問等に対する回答などをきめ細かく行うなどして、大人数授業の問題点解消に努めている。



現在、実施から1年が経過した時点であり、まだ試行錯誤は続いているが、アンケートなどによる学生からの反応は、

自分の英語力の長所と弱点をしっかりと認識できるようになった、しっかり学習を続けていけば力が伸びることがわかった等、肯定的な意見が多い。自宅からインターネット経由で学習できるという点がまだ実現していないが、今後この点も含めてさらに効果的な科目になるよう、改善を続けていきたい。

2006年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

<言語教育科目担当部会>

- ◆英語教育研究室
 - 4/1 前期FDセミナー
 - 6/29～7/12 前期カリキュラムアンケート
 - 7/1 前期FDセミナー
 - 9/19 後期FDセミナー
 - 12/2 第8回大柴杯記念スピーチコンテスト
 - 12/9 後期FDセミナー
 - ・次年度カリキュラム担当について
 - 12/16～1/16 後期カリキュラムアンケート
- ◆ドイツ語教育研究室
 - 7/21, 2/20 担当者連絡会
- ◆フランス語教育研究室
 - 6/23, 12/15 担当者連絡会
- ◆スペイン語教育研究室
 - 7/19, 1/24 担当者連絡会
- ◆中国語教育研究室
 - 2/2 担当者連絡会
- ◆諸言語教育研究室
 - 7/3, 11/22 担当者連絡会
- ◆日本語教育研究室
 - 2/28, 3/1 担当者連絡会
- ◆言語科目共通
 - 12/16～1/16 言語教育科目授業評価アンケート

<総合教育科目担当部会>

- ◆スポーツ人間科学教育研究室
 - 4/3 担当者連絡会
- ◆総合部会
 - 3/9 総合教育科目担当者連絡会

<学外対応>

- 4/28 大阪経済大学人間科学部 来学
「英語カリキュラムについて」
- 9/6 国学院大学総合学生センター事務部 来学
「全カリのカリキュラム概要および運営、
嘱託講師制度について」
- 12/13 ベネッセコーポレーション、日本電子専門
学校、大阪総合デザイン専門学校、全
国専門学校情報教育協会、R.G.B.教育デ
ザイン有限会社 来学
「立教大学におけるFDへの取組について」
- 12/22 学習院大学総合企画部 来学
「立教大学における英語教育の実情について」

<特色GP「立教科目」関連>

- ◆「特色GP採択記念シンポジウムⅡ」開催
「生き方を問う授業：教養教育の可能性を探る」
～全カリ総合B科目～
日時：2006年12月16日(土) 13:30～15:30
場所：池袋キャンパス 8202教室
事例報告:
 1. 学生部提案科目「対人コミュニケーション」
福原 久美 (学生相談所カウンセラー)
佐藤 一宏 (学部学生生活課長)
小林 潤 (理学部生命理学科1年)
 2. キャリアセンター提案科目「仕事と人生」
井上 雅雄 (経済学部教授)
加藤 敏子 (キャリアセンター事務部長)
菊地 真美 (文学部文学科1年)
 3. チャプレン室提案科目
「信じること、生きること」
西原 廉太 (文学部助教授)
香山 洋人 (チャプレン)
市毛 友里 (文学部フランス文学科3年)
- コメンテーター：白石 典義 (経営学部長)
司会：鈴木 秀一 (全カリ運営委員、経営学部教授)
- ◆「『建学の精神』や教養教育にかかわる教育プロ
グラムの調査・視察」(3/15～16)
出張者 山本 博聖 (全カリ部長)
安松 幹展 (全カリ総合教育担当部会
専門委員、社会学部助教授)
豊田 雅幸 (学院史資料センター)
藤原 芳行 (全カリ事務室課長)
吉池 栄 (全カリ事務室)
- 訪問校 九州大学、長崎大学
- ◆DVD版「立教チャレンジ」の制作
学生部、キャリアセンター、チャプレン室事務課
- ◆「オンデマンド授業『茶、虎そして人』(2007
年度後期開講予定)」の制作 (9/1～3/31)
上田 信 (全カリ総合部会長 文学部教授)
メディア・センター
- ◆「履修計画・登録案内コンテンツ (2007年4月
Web掲載予定)」の制作
全カリ運営センター、教務部
メディア・センター

2006年度 全学共通カリキュラム運営センター メンバー一覧

2007. 3. 1現在

<運営委員会>

	氏名	所属	小委
部長	山本 博聖	理 物理	-
部会長	小林 純 ☆	経済 経済	言語
	上田 信 ☆	文 史	総合
学部選出	井出 万秀	文 文	言語
	弘末 雅士 ☆	文 史	総合
	須永 徳武 ☆	経済 経済	言語
	中江 幸雄	経済 経政	総合
	青木 昇	理 数	言語
	松山 伸一 ☆	理 生命	総合
	関 礼子	社会 現代	言語
	李 旼珍 ☆	社会 社会	総合
	東條 吉純	法 国比	言語
	中北 浩爾 ☆	法 政治	総合
	溝尾 良隆	観光 交流	言語
	松村 公明 ☆	観光 交流	総合
	赤塚 光子 ☆	コ福 福祉	言語
	河東 仁	コ福 コ政	総合
	松本 茂 ☆	経営 国経	言語
	鈴木 秀一 ☆	経営 経営	総合
	(前期)北村 洋	現心 心理	言語
	(後期)大石幸二☆		
	森 秀樹 ☆	現心 映像	総合
	専門委員	森 聡美 ☆	法 法
小松 英樹 ☆		社会 社会	言語
中島 俊克 ☆		経済 経済	総合
安松 幹展		社会 メ社	総合

<言語構想小委員会>

小林純、井出万秀、須永徳武、青木昇、関礼子
東條吉純、溝尾良隆、赤塚光子、松本茂
北村洋／大石幸二、川崎晶子、新野守広
小倉和子、飯島みどり、谷野典之、石坂浩一
池田伸子、森聡美、小松英樹

<総合構想小委員会>

上田信、弘末雅士、中江幸雄、松山伸一
李旼珍、中北浩爾、松村公明、河東仁、
鈴木秀一、森秀樹、星野宏美、是永論
山田裕二、泉本利章、沼澤秀雄、安松幹展、中島俊克

☆印は2006年度新任

<言語教育科目担当部会>

部会長：小林 純

研究室名	氏名	所属	
英語	主任 川崎 晶子 ☆	コ福 福祉	
	黒木 龍三	経済 会計	
	佐竹 晶子 ☆	経済 経政	
	高山 一郎	経済 経済	
	実松 克義	社会 社会	
	森 聡美	法 法	
	山田 久美子	法 政治	
	鳥飼 慎一郎	法 国比	
	久米 昭元 ☆	経営 国経	
	Glick Christopher ☆	観光 交流	
	Cunningham, Paul A.	観光 交流	
	ドイツ語	主任 新野 守広	社会 現代
		竹原 創一 ☆	文 キ
副島 博彦		文 文	
小松 英樹 ☆		社会 社会	
宮内 敬太郎		コ福 コ政	
斎藤 松三郎		観光 交流	
フランス語	主任 小倉 和子	観光 交流	
	桑瀬 章二郎 ☆	文 文	
	菅谷 憲興 ☆	文 文	
	吉岡 知哉 ☆	法 政治	
	Delmont - Hosaka, Marie	法 政治	
	中島 弘二 ☆	コ福 福祉	
	スペイン語	主任 飯島 みどり	法 国比
佐藤 邦彦		社 現代	
鈴木 正男		社 現代	
中国語	主任 谷野 典之	経済 経政	
	呉 悦	経済 経政	
	笠原 清志 ☆	経営 経営	
諸言語	主任 石坂 浩一	経済 経済	
	小林 純 ☆	経済 経済	
	漆山 秋雄	理 化	
日本語	主任 池田 伸子	経済 会計	
	李 鍾元	法 政治	
	田中 望	観光 交流	

* 言語部会長の兼務

<総合教育科目担当部会>

部会長：上田 信

研究室名	氏名	所属
人文学	主任 星野 宏美 ☆	文 文
	月本 昭男	文 キ
	武藤 文夫 ☆	文 教
	浦野 聡	文 史
	加藤 定彦 ☆	文 文
	佐々木 一也	文 文
	三浦 雅弘	社会 現代
	社会科学	主任 是永 論
関口 智 ☆		経済 経政
原田 久		法 国比
高橋 紘士		コ福 福祉
自然科学	主任 山田 裕二	理 数
	平原 聖文	理 物
	Horn, Ernst ☆	理 化
	上田 恵介	理 生命
情報科学	主任 泉本 利章 ☆	観光 観光
	深津 行徳	文 史
	長島 忍	経済 経済
	真島 恵介	理 生命
	岡太 彬訓	経営 経営
	小林 悦雄	コ福 福祉
スポーツ 健康科学	主任 沼澤 秀雄	コ福 福祉
	大生 定義 ☆	社会 社会
	佐野 信子	社会 現代
	安松 幹展	社会 メ社
	濁川 孝志	コ福 コ政
	松尾 哲矢	コ福 コ政
	都築 誉史 ☆	現心 心理

全カリニューズレター No.22
発行 2007. 3. 31
発行人 山本博聖
編集人 松本茂、弘末雅士、鈴木秀一、森聡美
発行所 立教大学
全学共通カリキュラム運営センター
印刷 神谷印刷株式会社

(1頁より続き)

ここで述べられているポイントは多くの教員が実践されていることと思う。しかし授業中での私語への対応が個々の教員の努力だけで良い方向へと向かう、とも思わない。すべてが選択科目である全カリ総合科目では、少なくともクラスサイズを適正規模の範疇に収

めることを実現し、それと同時に山口先生の指摘されているポイントを個々の教員が自分なりの方法で実践し、それらをFDなどを通して共有することから始めることが重要である。